

71

にっぽん てつぐく かみ おおふじ やまお
日本の哲学であり神である大富士の山をろがむわれは

のむらきよし
野村清

【歌意】日本の哲学であり、神でもある偉大な富士山を拝んでいる。

〈鑑賞〉作者にとつては、富士山は生き方の指針です。誇り高く、崇高な生き方

すうこう

を教えてくれる「遥かな恩師」としての富士山。どんな教科書よりも教科書なものが、大自然には存在しているのかもしれない。

72

く くら ふじ いただき ひと ひ
昏れゆくや暗める富士の頂に人がともす燈またたきそめぬ

くぼたしゅういちろう
窪田章一郎

【歌意】日が暮れていく。暗くなっている富士山の山頂に人が灯している明かり

またた
 が瞬き始めた。

〈鑑賞〉夏の夜に富士山に登る人が持つ明かりは、ふもとからも見ることができ

ます。夏には列になるほどです。作者は四十四番の歌の作者の長男です。

大学教授を務めた国文学者でした。

73 いただける笠雲光り夕雲にまぎれず遠き富士山は見ゆ

かさぐもひか ゆうぐも

とお ふじさん み

さとうきたろう
佐藤佐太郎

【歌意】山頂にかかつている笠雲が光り、夕方の雲に紛れることなく、遠くの富士山が見えている。

〈鑑賞〉富士山に笠のような雲がかかると雨が降ると言います。作者は千九百九十年に宮城県に生まれた歌人で、千九百八十七年に亡くなるまでに多くの歌を遺しています。「幼等のあそびの中に此頃はわが子まじはりその声聞こゆ」など、ほのぼのとした歌も詠みました。

74 いかる啼^ないて富士^{ふじ}のかたへにゆきしとき木群^{こむら}になける慈悲心鳥^{じひしんちよう}のこゑ

みや

しゅうじ

宮 柊二

【歌意】イカルが鳴いて富士山の傍の方へ飛んでいったとき、木の繁みに聞こえているのは慈悲心鳥の声だ。

〈鑑賞〉「いかる」も「慈悲心鳥（ジユウイチとも言います）」も鳥の名前です。どちらも特徴的な声で鳴きます。作者は富士山のふもとの鳥の声に耳を澄ませながら、短歌を詠んでいます。富士山は、鳥にとっても楽園なのです。「白き富士あめ美しと飛行機の窓に見てゆく春蘭を抱きて」等、作者は他にも富士山を何首か詠んでいます。

76

雪の富士車窓に映えておのづから帽を取りたり旅する我は

田谷 鋭

【歌意】雪の富士山が列車の窓に美しく見えて、旅をしている私は自然と帽子を取ったのだった。

〈鑑賞〉

東海道線の富士川を渡る辺りから原駅の辺りまで、列車の窓から富士山がよく見えます。すばらしい自然に畏敬の気持ちを持って、帽子を取った作者の気持ち。天地に敬意をはらって生きてきた日本人の山（富士山）への想いを感じる歌です。

77

湧き上りたちまちに去る山の霧富士が見えると子のおどろきよ

武川 忠一

【歌意】湧き上がってはたちまちに消え去った霧。その切れ間に富士山が見える、と子どもが驚いていた。

〈鑑賞〉

湧きあがってはたちまちに去る山の霧。富士山が見えたよ、と父親に告げる子どもの驚き。息をのむ姿、さらには弾んだ歓声までもが眼の前に浮かんでくるようです。

富士詣で五月三十日の浅葱空浅きはわれの夢とこそ憶へ

ふじもつ さつきみ そか あさぎぞらあさ

ゆめ おもえ

つかもとくにお
塚本邦雄

【歌意】

富士詣でをする五月三十日の薄い藍色の空の色。その色の浅葱のように、浅いのは私自身の夢だと思われる。

〈鑑賞〉

富士山は信仰の対象です。今の七月頃、富士山にお参りをする習慣がありました。その季節の空のような薄い藍色。そのイメージのように「浅い」夢をみているという歌。「ずぶ濡れのラガー^{はし}奔るを見下ろせり未来にむけるものみな走る」「日本脱出したし 皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも」などの歌でも知られる作者の富士山を詠んだ歌です。

晴れわたる富士といふともおのづからあそぶ白雲は雪にかけ置く

は ふじ う

ず

しらくも

ゆき

お

うえだ みよじ
上田三四二

【歌意】

晴れわたっている富士山といっても、自然と白い雲は漂っている。その白い雲の影が雪の上にかかっている。

〈鑑賞〉

漂っている白い雲が雪の上にかげを置いているという歌です。思わず雲も遊びたくなるような大らかなみんなの富士山です。

まつばら ゆうやけしず てん
松原に夕焼沈み天なるやおぼろに富士の消え入らんとす

たまき とおる
玉城 徹

【歌意】松原に夕焼けが沈み、空にそびえていた富士山の姿もだんだんと消えていこうとしている。

〈鑑賞〉この松原は沼津の千本浜でしょうか。そこから見る夕方の富士山。日没とともにその姿がだんだんと消えています。作者はそのグラデーションを楽しむように見続けています。夕暮れ時の大自然が織りなす豊かな表情の物語です。